

## 佳作

### 「尊敬する冬菊」

山形県山形市立第六中学校

3年 田宮 いこい

「冬菊のまとふはおのがひかりのみ」これは私が初めて衝撃をうけた句です。中学3年生の夏、国語の授業で教わりました。この句を現代語訳すると「冬菊がその身にまとうのは、冬の日を浴びて自らが放つ光でできた衣だけなのだろうか。」となります。私が先生の説明を聞き最初に思ったことは、冬の寒さの厳しさで一生懸命咲いている様子や誰にも染められず自分の力で自分らしく咲いている様子がとても素晴らしい、見習いたい、のようなことに近い、言葉にならないものでした。冬菊とはどんなものか、作者はどんな人か、もっと深く知りたくなり、調べることにしました。すると、文法から読み取り解説されていました。「隠喩を用い、端然とした佇まいを表現、ひらがなを多く用い、ほんのりとやさしい光を帯びた花や温もりを連想させる」私が感じたことよりは、やさしさや、礼儀正しさが強調されていたように思いました。

作者は水原秋桜子。私はてっきり女性だと思い込んでいましたが、そうではありませんでした。水原秋桜子は大正から昭和にかけて活躍した俳人で、医学を志す学生時代に俳句を知り、高浜虚子などに師事しました。しかし、その後虚子らの俳句と姿勢が異なってしまったため、新興俳句運動を展開し、新たな潮流を生むこととなりました。水原が詠んだ「冬菊のまとふはおのがひかりのみ」では、凜とした姿を印象的に表現していましたが、私が最初に感じたのは、虚子に反対されても自分らしく一生懸命な姿勢だったのではないかと思います。

私は国語の授業という日常から衝撃を受けて深く知り、新たな感情を学ぶことができました。そして、もう一つ私の心を動かした句があります。「咳をしても一人」明治から大正時代に活躍した尾崎放哉が詠んだ句です。現代語訳すると「咳をしたが、そこには私たった一人だ。」この句から風邪をひいて咳をしていたとしても、声をかけてくれる人すらない孤独感や寂しさを感じます。また、短く詠むことでそれを表現しています。私は早く妻を亡くしたのだろうか、両親を亡くしてしまったのだろうか、とかわいそうに思っていました。尾崎は東京帝国大学を卒業後、生命保険会社の要職まで登り詰めたエリートですが、酒ぐせや態度の悪さで退社。その後一人になってしまったようでした。私は自業自得のように思えました。しかし、こんなに素敵な形で自分の思いを記せるのに、もったいないな、とも思いました。

尾崎はもう一つ、こんな句も残しています。「こんなよい月を一人で見つめる」

自由律俳句で、現代の私たちにも意味の分かる言葉で詠まれているのに、どうしてしみじみと感じるのでしょうか。本当ならば「この月は素晴らしいね」「本当だね」という会話も聞こえてきそうですが、尾崎はたった一人、月が美しくれば美しいほど、孤独を感じているのです。尾崎は長年の不養生から病におかされ、餓死に近い状態で亡くなりました。自業自得、といえども、やっぱりかわいそうだと思います。

さて、ここまで衝撃を受けた句について紹介してきましたが、私には興味のある仕事はいくつかあります。それに合わせて進路も、大きく二つに見通しをたてています。一つは高校では商業科に入り、高校を卒業したらアルバイトや就職しながら夢をかなえるために努力する。もう一つは、高校で夢をはっきりさせ、専門学校や4年制大学で学ぶことです。進路をどちらにしたとしても、大切なことは一つ、共通して見えてきます。それは、社会で生きていくということです。そこで先ほど述べた二つの俳句から学べることが見えてきました。

「冬菊のまとふはおのがひかりのみ」では、遅咲き、つまり一人遅れてしまっても一生懸命やることや、端然と佇む冬菊のように礼儀正しくありたい、そして何より自分らしくありたいということです。これは、目標としてです。逆に「咳をしても一人」では、作者の生涯を背景に、だらしなさで一人になり、孤独を感じ、寂しくなる。最後も苦しさや寂しさ、悲しさを感じながら亡くなってゆく。いわゆる反面教師ではないけれど、そうありたくない、と考えるきっかけになりました。

私は、日常のほんの一コマ、国語の授業で衝撃を受け、興味をもち、深く調べ、最後には自分の将来を考えるきっかけにもなってくれました。自分の夢をかなえるために、直接的に何かを頑張るのももちろん大事だけど、興味をもてるものに出会うことや、気になったことについて調べるという日常の中の一つ一つも大切だということに気が付きました。そして、これからはそういうことを大切にしていこうと思います。私、夢はかなったかな。